



Data

監督・脚本: エヴァ・ウッソン
 出演: ゴルシフテ・ファラハニ / エマニュエル・ベルコ / ズェベイデ・ブルト / マイア・シャモエヴィ / エヴィン・アーマドグリ / ニア・ミリアナシュヴィリ / エロール・アフシン

👁️👁️ みどころ

30年間続いた「平成」の世の間に、日本の“安保法制”は大きく変わった。しかし、平和ボケした日本人の多くは、イラク北西部で2014年8月から2015年11月の間に起きた“この事件”を知らないはず。それは仕方ないが、せめて興味を持ち、勉強する意欲は持たなくちゃ！

“世界の最も美しい顔100人”のベストテン常連の美人女優が演じる女兵士バハールがカッコいいのは当然だが、その涙とは？他方、原題の『太陽の娘たち』とは？

3月に公開予定の『ナディアの誓い』とともに、こりゃ必見！新しい元号が始まる中、老いも若きもしっかり目を世界に向けて勉強しなければ・・・。

— * — * — * — * — * — * — * — * — * — *

■□■イラク戦争の終結は？クルド人やヤズディ教徒は？■□■

2001年には、タリバン政府とアルカイダの武装勢力を、アメリカをはじめとする“有志連合”が攻撃することによってアフガニスタン戦争が発生した。また、2001年の9月11日世界同時多発テロを受けて2003年3月にはジョージ・W・ブッシュ大統領（父ブッシュ）はアメリカ合衆国を主体とした“有志連合”にイラクの攻撃を命じ、5月には「大規模戦闘終結宣言」が出された。しかし、イラク国内の治安は安定せず、戦争は続行したため、やっと2010年8月にオバマ大統領が「戦闘終結宣言」と「イラクの自由作戦」の終了を宣言し2011年12月14日に米軍が完全撤退したことによって、イラク戦争の終結が正式に宣言された。ところが、その後もイラクの治安は安定しないばかりかIS（イスラミックステート）の活動がさかんになり、そのニュースが大量に日本にも報道さ

れた。本作の一方の主人公として登場する、片目の女性ジャーナリスト、マチルド（エマニュエル・ベルコ）が現地取材していることも、そのニュースソースの1つだったのだろう。

日本が1945年の敗戦から戦後70年以上戦争をすることなく、平和が守られてきたのは幸せなこと。しかし、これは憲法9条のおかげだと言って、憲法改正に反対する単純な考え方に私は賛成できない。私たち日本人は日本が戦後70年以上平和だったことを単純に喜んでいるが、本当にそれだけでいいの？イラク戦争終結後のイラクの現実は？クルド人自治区の現実は？そしてヤズディ教徒の現実は？

■□■本作の着想は2014年の“この事件”から！■□■

本作の冒頭は、2014年8月に、ISの攻撃部隊がイラク北西部のシンジャル山岳地帯に侵攻し、シンジャル山脈という天然の要塞に守られ、ヤズディ教という独自の宗教への信仰を守り続ける人々が暮らす地域で、逃げ遅れた人々を大量虐殺したことが字幕で表示される。続いて、「やがて、ヤズディ教徒、クルド人武装勢力、クルド自治区政府軍は、抵抗部隊を組織し始め、女性の戦闘員だけで構成された武装部隊も前線に立った。」という字幕が表示される。しかし、それだけでは、平和ボケした私たち日本人にはサッパリ何のことやら……。

そんな字幕の後、スクリーン上は垢まみれの女性の顔の極端なクローズアップのシーンになる。目を閉じたままの間はこれが一瞬何のシーンか全くわからなかったが、目が開きおびえた表情が見え、その視線の先にたなびく白と黒の煙が見えてくると……。フランス出身の女性監督エヴァ・ウッソンが本作冒頭でみせるこのシーンは、物語全体のどんなシチュエーションの中で誰を撮っているものかサッパリわからないが、その映像美はすばらしい。さて、この美しい(?)女性は一体誰？そして、彼女はなぜ今こんな状態で生死の境をさまよっているの……？

戦争はない方がいいに決まっているが、なぜ彼女はこんな戦いの場にいるの？本作は2014年8月3日から2015年11月13日に実際に起きた事件を取材したエヴァ・ウッソン監督の、そんな着想から生まれることに……。

■□■『太陽の娘たち』vs『バハールの涙』、どちらが好き？■□■

本作の原題は、英題の『GIRLS OF THE SUN』と同じ『太陽の娘たち』。これは、イラク出身のクルド人ながらフランスに留学して弁護士をしていた女性バハール（ゴルシフテ・ファラハニ）が一転して女兵士となった後、彼女が率いることになる女性部隊の名前だ。

愛する夫と息子に恵まれる中フランスで充実した弁護士活動をしていたバハールは、2014年にクルド人自治区に住む家族の元へ帰省した際、ISの襲撃を受けることに。そ

ここで、男たちは皆殺しにされ、女たちは性的奴隷として売買され、少年たちは“小さき獅子たちの学校”と呼ばれる I S 戦闘員の養成校へ強制的に入れられることに。しかし、バハールはテレビで見たクルド人自治区の女性代議士ダリア・サイードのインタビューで、彼女が「必ず助け出すから、何とか私に電話して」と訴えかけるのを聞いて脱出を決意。臨月の女性ラミアたちと共に I S の陣地から脱出することに成功した。そして、「被害者であるより戦いたい」というラミアの言葉に心を動かされたバハールは、拉致された息子を助け出すため、武器を取って戦う決意をし、女性戦闘員で構成された武装部隊“太陽の女たち”に参加し、その指導力で隊長になったわけだ。

チャン・イーモウ監督の『グレートウォール』(17年)には、「イーモウ・ガール」として中国人の美人女優ジン・ティエンが、女性兵士で構成されている“鶴軍”の司令官役として登場し、大活躍を見せた(『シネマ 40』52頁)が、同作はあくまで3D映像によるエンタメ大作だった。それに対して、バハール率いる“太陽の女たち”の兵士は数こそ少ないものの、それぞれ必死だから、スクリーン上にエンタメ色は一切なくリアル感でいっぱい!しかし、あなたは、原題の『太陽の娘たち』と邦題『バハールの涙』の、どちらが好き?

■□■バハールは監督の創造! 絶世の美人女優がその役を! ■□■

本作は一方では“太陽の女たち”の隊長として自治政府軍ペシュメルガやクルド人武装勢力と共に I S との戦いに参加しているバハールの部隊の今の活動を描き、他方では、そこに至るまでのバハールの軌跡を描いていく。バハールの妹は I S によるレイプのショックで自殺してしまったが、バハールは美しいだけでなく強いから、そんな被害を受けてもあくまで生き延びる手段を考えていたらしい。

そんな本作の主人公バハールを演じるのは、第59回ベルリン国際映画祭の最優秀監督賞(銀熊賞)を授賞した『彼女が消えた浜辺』(09年)で主演した美人女優ゴルシフテ・ファラハニ(『シネマ 25』83頁)。彼女は、その後『エクソダス: 神と王』(14年)(『シネマ 35』301頁)、『パターソン』(16年)(『シネマ 40』未掲載)、『パイレーツ・オブ・カリビアン/最後の海賊』(17年)(『シネマ 40』未掲載)等に出演しているが、彼女のエキゾチックな美貌は、2013年から〈世界でもっとも美しい顔100人〉に認められ、2014年6位、2015年5位、2016年4位、2017年9位と4年連続でトップ10入りしている美女だ。そんな彼女も I S の捕虜とされた時はレイプを免れるべく、あえて顔を黒く塗りつぶし、美しい顔を隠していたが……。

■□■片眼の女性ジャーナリストには実在のモデルが! ■□■

フランスがイラク戦争にいかに関わったのかについて私はよく知らないが、本作にはフランス人の戦場ジャーナリストの女性、マチルドがバハールと並ぶ主役として登場する。

彼女もバハールと同じように夫と子供を持つ身だが、ジャーナリストの夫を紛争地で亡くした傷も癒えぬまま、彼女は愛娘をフランスに残しイラクのクルド人自治区での取材を続けていた。彼女は独眼竜政宗こと伊達政宗と同じように左目に黒い眼帯をかけていたが、これはイラクでの取材中に爆弾の破片を受けて失明したため。彼女は「おかげで横になれずすぐに眠れるわ」と気丈に語っていたが、内心その苦しみは如何ばかり・・・。

パンフレットにあるエヴァ・ウッソン監督のインタビューによれば、彼女は自らジャーナリストたちに抵抗するクルド人の派閥を取材する中で、戦地で左目を負傷し黒い眼帯を巻いていたメリー・コルヴィンという女性ジャーナリストと出会ったそうだ。このメリー・コルヴィンの存在は監督に「戦争における女性の意味」を考えさせることになり、この戦場ジャーナリストが主人公のスポークスマンとして本作の脚本に加えられたそうだ。したがって、バハールは逃げ出した女性たちや戦場に身を投じた女性たちの証言からエヴァ・ウッソン監督の創造にかかるキャラクターだが、マチルドはメリー・コルヴィンという実在の戦場ジャーナリストのモデルがあったわけだ。

ちなみに、内戦下のシリアに2015年に入国し、過激派組織に拘束されていた日本の戦場ジャーナリスト安田純平氏は2018年10月に釈放されたが、その裏ではきつと多額の身代金が支払われたはず。そのため、日本では「自己責任」のあり方が大きな議論になった。すると、マチルドが片目になったことに対する補償はあるの？また、マチルドはこんな危険な戦争地帯でここまで「太陽の女たち」に密着した取材をしているが、もし死亡したらその補償はあるの？それとも、それはあくまで自己責任・・・？

■□■ “自由・平等・博愛” vs “女・命・自由” ■□■

日本の国歌『君が代』はスローテンポだが、中国国歌『義勇軍進行曲』やフランス国歌『ラ・マルセイユーズ』は“革命ソング”だから、歌詞は物騒だし、テンポは行進曲風で早い。私の大好きな劇団四季のミュージカル『レ・ミゼラブル』では、学生たちが歌う「民衆の歌 (Do You Hear the People Sing)」のシーンが中盤の1つのクライマックスになる。また、人気の宝塚歌劇『ベルサイユのばら』のテーマである「フランス革命」は1789年の出来事だが、そこでスローガンとして叫ばれたのが“自由・平等・博愛”だ。

それに対して本作でバハール率いる“太陽の女たち”の隊員がスローガンとして叫ぶのは、“女・命・自由”。そして、その3つのキーワードをふんだんに取り入れた歌が「太陽の女たち テーマソング」で、その歌詞は下記の通りだ。

記

私たちがやって来たぞ、私たちが街に入っていくぞ、戦いの準備は万端だ 私たちの信念で、奴らを一掃しよう、新しい時代がやって来る、女と命と自由の 時代、新しい時代がやって来る、女 命 自由の時代 女たち、それは最後の銃弾、女たち、手元に残された手榴弾、この体と血が、土

地と子孫を育む、母乳は赤く染まり、私たちの死が、命を産むだろう
私たちはゴルディンの女、さあ、街に入ろう、戦いの準備は万端だ
私たちの信念、新しい日の始まり、新しい時代がやって来る、女と命と自由の時代、新しい時代がやって来る、女 命 自由の時代

フランス革命における“自由・平等・博愛”のスローガンもすごいが、本作にみる“女・命・自由”のスローガンもすごい。何かと慎重派で、米軍の空爆支援を待ち続けている自治政府軍ペシュメルガの司令官に対して、決死の覚悟を固めているバハール率いる“太陽の女たち”の部隊は勇猛果敢。ある日、I Sの捕虜から、地下通路の向こうには子供たちが強制的に入れられているI Sの「小さき獅子たちの学校」があることを知ったバハールは、地雷の危険も顧みず、捕虜を先頭に立てて地下通路からの攻撃を提案し、やっとそれが承認されることに。そんな中で女たちが歌う「太陽の女たち テーマソング」は実に心に沁みわたる。命懸けでI Sの支配地から脱出する際に身重だったラミアが急に産気づいたのは誤算だったが、バハールの励ましの中でギリギリ境界線を越えた直後に出産したのもすごい。

パンフレットには、バハールが攻撃前に隊員たちにハッパをかける次の“訓示”があるので、それを掲載すれば次の通りだ。

私たちの存在こそ勝利
迫害に屈しない行動こそ勝利
戦うことが勝利
敵は怖いものなしの私たちを恐れてる
女声を聞くと震えあがる
私たちの経験以上に
悲惨なことはない
敵が殺したのは恐怖心
捕えられた女の数だけ
兵士が増えた

この訓示はかつての日本帝国陸軍の部隊長の訓示以上にすごい。本作では、そんなバハール率いる、女だけの戦闘部隊の命懸けの活躍に注目！

■□■地下通路の向こうには何が？どんな戦いが？■□■

本作終盤のハイライトは、バハール率いる“太陽の女たち”の部隊が捕虜の男を先頭に立てて未知の地下通路を渡り、“小さき獅子たちの学校”のあるI S支配下の町に突入していくシークエンスになる。捕虜の話では、既にI Sはこの街を放棄しているそうだが、単純にそれを信じることができないのは当然。また、放棄したと言っても、完全放棄なのか、それとも監視反撃のための部隊を残しているのかもわからないから、用心する必要がある。

地雷も、地下通路以外に街のどこに埋め込まれているのかも一切不明だ。

近時、大ヒットしたハリウッド映画である『ハートロッカー』(08年)、『シネマ24』15頁)や『アメリカンスナイパー』(14年)、『シネマ35』24頁)を見れば、敵がどこにいるのかわからない街の中で、一軒一軒しらみつぶしに「クリアー」していく作業は大変なことがよくわかる。バハールたちの目下の任務は“小さき獅子たちの学校”を目標に、街全体を「クリアー」し、ISの旗を降ろして、自治政府軍の旗を掲げること。ISの部隊が本当に街を放棄したのなら、“小さき獅子たちの学校”で養成していた男の子たちも一緒に連れて行ったの?それとも・・・?

バハールたちは1人1人そんな不安を抱きながら地下通路を一步一步進んでいったが、さてその向こうには何があるの?そして、どんな戦いが待っているの?それは、あなた自身の目でしっかりと。そして、バハールたちの男の兵士たちに勝るとも劣らない統率された戦いぶりに拍手!

■□ 『ナディアの誓い』も観なくちゃ! ■□

2018年の日本の将棋界は藤井聡太7段の登場に沸いたが、2019年1月の日本の囲碁界は9歳の天才少女、仲邑菫(なかむら すみれ)ちゃん的话题で沸いている。わずか9歳の女の子が、井山裕太5冠や韓国の女流棋士崔精(チェ ジョン)9段らと、先手番にコミ(6目半)を与えない、互角に近い条件で挑んだこと自体が異例だが、さてその勝敗は?

このように、2019年初春の女の子の話題が菫ちゃんなら、2018年の世界の女の子の話題は、イラクのヤジディ教徒である23歳の女性ナディア・ムラドさんがノーベル平和賞を受賞したことだ。2014年8月までイラク北部の小さく静かな村、コチョ村で母と兄弟姉妹たちと幸せに暮らしていた彼女は、ISIS(イスラム国)による少数民族やヤジディ教徒の大虐殺の中で捕えられ、性奴隷として3ヶ月扱われたが、何とか脱出に成功。そして、2015年12月の国連安全保障理事会で、ISISの虐殺や性暴力についての証言を行い、ヤジディ教徒の希望の存在となった。バハールは“女戦士”になったが、ナディアはまだ捕えられている同胞や、世界中の性暴力被害者のために表舞台に立つことを決意し、世界に対し自らの体験の情報発信に努めたわけだ。

しかして、本年3月にはそんなナディアに密着した感涙のドキュメンタリー映画『ナディアの誓い』が公開されるから、本作と共にこりゃ必見!

2019(平成31)年1月25日記